

現代における日本の伝統的工芸品の海外受容プロセス

代表研究者 高島 知佐子
静岡文化芸術大学 文化政策学部 芸術文化学科 准教授

研究要旨

本研究の目的は、現代における日本の伝統工芸の海外受容をテーマに、伝統工芸産地・事業者の海外展開の動向を調査し、日本の伝統工芸がいかに海外で受容されているのかを明らかにすることであった。本目的を踏まえ、フランス、ドイツ、オランダに絞り、現地で活動を展開する日本の伝統工芸産地・事業者を調査した。特に、国際見本市、日系文化施設、美術館、ギャラリー等での活動を行う伝統工芸産地・事業者を対象とした。フランスとドイツでは毎年大規模な国際見本市が開催されており（メゾンエオブジェ、アンビエンテ）、国や自治体の支援を受けて多くの伝統工芸産地・事業者が出展している。また、オランダは大使館を通して九州地方との連携を進めているほか、日本の工芸に特化した新しい見本市が現地で開催されている。

現地調査で明らかになったことは、(1) 海外展開を進める伝統工芸の品目には偏りが生じていること、(2) 産地により海外展開のあり方に違いがあることであった。また、国際見本市や美術館等での日本の伝統工芸の発信では、19 世紀末に構築された「ジャポニズム」の文脈が用いられることが多く、歴史性が強調されていた。そこで、本研究では、文化関連施設や大きな見本市を通じた大規模な海外展開が可能な伝統工芸産地・事業者は、19 世紀末から 20 世紀初めに海外輸出された工芸品との繋がりを持つという仮説を立て、この時期に輸出された工芸の産地・事業者と現在海外展開する産地・事業者の関係を文献と現地調査から解明することに取り組んだ。

その結果、明治期に積極的に輸出された陶磁器、漆器、金工、染織、硝子のうち、陶磁器、染織の規模の大きい産地、特に陶磁器では、歴史的な文脈を生かし、文化関連施設や国際見本市等を通じた海外展開を行なっていることがわかった。一方、今回調査した限りでは、漆器や金工、硝子ではこのような形の活動は見られなかった。また、19 世紀には重要な輸出品ではなかった打刃物の海外展開が増えていることも明らかとなった。今後は伝統工芸の海外展開に関する研究を体系化するために、(1) 海外では歴史性の弱い伝統工芸や規模の小さい産地・事業者の活動、(2) 打刃物の産地・事業者の活動を対象にしていく必要があると考える。特に前者は全国の多様な伝統工芸の存続という点において重要性が高いと思われ、今後は本研究の成果を踏まえて、前者の研究に取り組んでいく。
